
Blue Paint

ginn

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Blue Paint

【Nコード】

N9954T

【作者名】

ginn

【あらすじ】

美術大学に通う主人公は、学園祭の展示会で、ひとつの印象的な絵画に出会った。

現実と夢の中で、主人公がつくり出した造形^{カタチ}は・・・

*今掲載しているものを少し修正し直してから先に進みたいと思い

ます
>
<

prologue(*)

一面の青。

水彩画で描かれた絵画。

透明な青と

重く沈む青。

色だけで描かれる世界。

輪郭はない。

カタチといったカタチはない。

私みたいなカタチを造形する人間は
少々理解に苦しむ。

つい、いつものように理屈を探ってしまう。

何を描いているのか。

何を思い描いたのか。

いつまで見つめていても
その答えは解らないけれど。

カタチのないセカイに
興味を抱く。

そして飛び込んだそのセカイで
その後、^{のち}

私は溶けてカタチを失った。

一色で描かれたそれは、
君のすべてを表していた。

一瞬でその青に
心を奪われる。

作品名 『アオイセカイ』
作者名 『itsuki』

青い空に虹がかかったその瞬間に。
酸性の雨に溶かされていくみたい。

prologue（*）（後書き）

ページを開いていただいております。

はじめて小説を書きます。

小説に関して無知に近いので、探りながらの執筆になりますが、よろしければこれからのストーリーにお付き合いしてくださると幸いです。

exhibition

「イチハラ・・・ニジ・・・？」

作者名を見て、私は首を傾げた。
ペンネームだろうか。

日本画学科のこの展示室には、50程の作品が展示されていて、その中には作者名にあだ名のようなものが付いているものがあつた。
だからこれもそうなのであろう、と思う。

今日は3日間で開催される学祭のちょうど中日。

この大学の建築学科に通う私は、普段私はあまり絵画などに接する機会があまりない。

日々黙々と建築について考える現実がある。

だからなのか、学祭というのが他学科に接する貴重な機会でもあり、その機会が好きでもある私は、1人ぶらりと気まぐれに入つたのがこの日本画学科展示室だった。

展示室では、何人かの日本画学科生が展示室を訪れた人々に作品の説明や、学科の説明をしていたりと、少々賑わいの中での絵画鑑賞だった。

「それ、虹^{ニジ}じゃなくてコウ^{コウ}って読むんだよ。」

ふと、後方から声がして私は振り向いた。

「市原^{イチハラ}虹^{コウ}。それ描いた奴のペンネーム。」

後ろに立っていた人物は、少し笑みを浮かべながら、私が見ていて

た青一色の絵画を指さして言った。

私と同じくらいの歳の男の子。日本画学科の学生だろうか。

私はその人が指差す絵画の方をもう一度見、絵画の下部にある小さなプレートの文字を読み直してハツとする。

「イチハラ・・・コウ・・・?!・・・あ、ニジじゃ・・・ないんだ・・・。」

私がそう呟くと、後ろにいた人物がクスツと笑う。

「まあ、普通に読んだら虹^{ニジ}だね。でもその本人は虹^{コウ}って読んでほしいよ。」

うーん・・・やっぱフリガナつけといた方がいいかな。」

何かに納得したような感じでその人物は名前が書かれたプレートを遠目に眺める。

「そいつ、フリガナのこと悩んでたんだよね。」

名前んとこ、フリガナついてたらダサイと思う?。」

その人物が私に向かっておもしろそうに笑いながら訊ねる。

なんだか申し訳ないような気持ちになってきた私は、すまなそうに答えるしかなかった。

「え・・・えと・・・。別にそんなことはないかと・・・。」

「そう?。」

確かめるように、納得するかのようにその人は言った。

私に訊かないでほしいと内心思う。ダサイとかそんなことは描いた本人が決めればいいのに。

「・・・はい。たぶん。」

だからそれしか言いようがない私だった。

「たぶんって……。」
またクスリとその人は笑った。

「とりあえず今日は虹^{コウ}って読んであげてやって。じゃ、ごめつくりどうぞ。」

その人は愛想よい笑顔でそういうと、踵を返して立ち去ろうとした。

「あ、あの……。」

私はその背中に向かって呼びとめるように声をかけた。

「……はい？」

その人の振り向き際に、パーマがかかった髪が小さくふわりと揺れる。

「この絵、描いた人と知り合いなんですか？」

私の質問に、その人はちよつと目を見開く。

「まあ、うん。同じ学科だから……。」

なるほど、やっぱり日本画学科生だったんだと目の前の人物の正体に確信する。

「描いた人、何年生なんですか？」

続けて、私は本題の質問をした。

作者の人物の学年は気になるというものだ。作品のレベルと、学年のレベルには相応性があるからである。

「2年だよ。」

「2年生……。」

つぶやきながら、自分と同学年^{タメ}だということが頭の中を過ぎる。

「わかりました、すみません呼び止めてしまって。ありがとございしました。」

軽くお礼を言つと、その人は「いえ。」と一言返し展示室にいる日本画学科生の元へと歩いて行った。

「市原 虹……2年生か……」
もう一度絵画を眺めながら私は小さく呟く。

淡く滲んだ青色の絵画。

吸い込まれそうな青の重なり。

不思議な世界……。

ずっと眺めていると気分が落ち着く……。

自分と同じ学年の人が、このような絵を描くなんて……。

私はまたしばらくその絵画を眺めた後、

小さな感心と関心を市原 虹に抱きながら、展示室を後にした。

exhibition (後書き)

学祭にペンネームって使うのかな・・・とか思いつつ使ってしまった・・・。

イチハラ ニジさんじゃなくてイチハラ コウさんです。

みなさま、画家の卵のイチハラ コウさんをお見知りおきください
^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9954t/>

Blue Paint

2011年11月14日01時26分発行